

<牧会ミニ通信>No.35 2021. 1. 10

横浜の教会に赴任して10年が経過した頃、共立女子聖書学院の山口昇院長から、ギリシャ語教師の依頼を受けました。神学校在学中は寝込むこと多く、単位不足で卒業が危ぶまれていた者であることを承知した上で呼びくださったのです。有難いことと感謝しました。

その頃は、教団のヤスクニの委員の一人でもありました。法案は審議未了を繰り返して廃案になりました。しかし、それで安心せず、さらに問題意識を深めるために、外から見つめ直すため、韓国渡航を企てました。初めてのフライトは新鮮そのものでした。とにかく、日本から離陸したこと自体が霊的覚醒の第一歩でした。特に、ソウル市内のマンモス会堂と群れをなしているキリスト者の多さに、目を見張りました。まるで、ガリバー旅行記のようです。さらに驚いたのは、白い息を吐き吐き、朝5時ともなると、聖書を片手に、早天祈祷会に集う信徒の群れです。「ハナ・ニム・アボシ!」・「アーメン!」という叫びが会堂内に響きわたります。二日目、「殉教者朱基徹牧師」の16ミリ映画を観る機会がありました。映像による朱牧師との出会いでした。これを期として、何と訪韓すること28回に及びました。このことについては別の機会に触れてみたいと思います。帰国してから、自らが牧会現場を見つめ直しました。一つは、祈祷の際の「神への呼びかけ」です。韓国では、教派を超えて、間違いなく「ハナ・ニム・アボシ! (唯一・さまの・父よ!）」と呼びかけているではありませんか。自分は、「神さま!」と、しか呼びかけていないことに、違和感を覚えました。もう一つは、「アーメン (本当にそうです)」です。日本の教会では、大半のものが、小さな声で、しかも、時に、慎しみ深く「アーメン」を口にします。「アーメン」をのみ込む人もいます。声が大きいか、小さいかは別にして、はっきりと、確信をもって「アーメン」と祈ることの大切さを覚えました。その頃から、教会の雰囲気が変わり始めたのです。いえ、変わりはじめたのは、なによりも、牧師のわたしでありました。特に、説教は、「・・・と思います」から、はっきりと言い切る説教へと変えられる契機となりました。

周東のぞみキリスト教会： 牧師 結城 晋次